

## トマス・ペインとアメリカ革命

トマス・ペインは何よりも『コモン・センス』の著者として知られている。これはアメリカ革命中の一七七六年一月フィラデルフィアで刊行され、はじめて公然かつ大胆に王政批判と独立論とを展開し、北米植民地の世論を独立の決断へと促がす重要な刺激剤となったパンフレットである。このようなパンフレットが、アメリカに育ちアメリカで活動してきた指導者によってではなく、イギリスから渡ってきたばかりの文筆家ペインによって書かれたことは、アメリカ革命についての興味ある事実の一つである。ペインは『コモン・センス』の著作のゆえに、アメリカ革命の代表的なイデオログといえるが、彼の思想はいくつかの点で、革命期アメリカの他の多くの思想家と異なっており、彼らの中では異色ある人物で

有 賀 貞

あった。彼はこのパンフレットの著者として名声を得たが、彼のアメリカとの関わり合いには異邦人的な要素が残った。

本稿は革命期アメリカの政治史におけるペインの意義<sup>(1)</sup>についての小論である。

### 一 『コモン・センス』の出現

『コモン・センス』が刊行されたのは、イギリスとの武力抗争が始まってから八カ月を経た時であった。一七六四年から六五年にかけて、印紙法反対闘争を展開して以来、北米植民地人は英本国の植民地政策に対する反対運動をくり返し、七五年四月にはマサチューセッツにおいて、英軍と民兵との間に武力衝突が起こり、一三植民

地は連帯して本国と武力をもって争うに至った。しかし、植民地人を代表する大陸会議は独立の意図を否定しており、闘争の目的を英帝国の内部において彼らの自由を確保することに限定していた。

もちろん、ジョージ三世への非難や王制への不信が植民地でまったく聞かれなかったわけではなく、植民地は独立すべしという議論もまったく出なかったわけではない。各植民地の事実上の革命政権やその代表から構成される大陸会議の公的な立場が王への反逆を否定し、独立の意図を否認していたとしても、王政批判やアメリカ独立論が戦争勃発の前後から私的に行なわれるようになっていた。

イギリスの政策次第では、独立すべきであるという考えは戦争の始まる前、すでに一七七三年から新聞にあらわれていた。「もしイギリスが今後いつまでもわれわれに課税しようとし続けるなら、われわれは別個の国になるであろう、そして遠からずしてアメリカは世界のどの国にも脅かされない強国となるであろう」とある筆者は論じた。他の何人かの筆者もアメリカは独立すれば偉大な国になれるという自信を表明した。時を同じくしてジ

ョージ三世および王制に対する批判も少しずつ現われ始めた。ある論者は王が契約に反して植民地議会の権利を侵害すれば、彼はもはやわれわれの王ではないと主張した。一七七四年秋に刊行されたあるパンフレットは王政の歴史は人間性の墮落の歴史であり、墮落した人間に対して神が与えたものであり、墮落しない人民は自らの政府をもつことができる」と論じ、王政からの解放を示唆した。またある説教者は「王が公共の善にとって障害となる場合には、彼は他の普通の害悪同様に排除されるべきである」と述べた。

戦争勃発後は即時独立を主張する短い文章が新聞に散見されるようになった。ある筆者は「イギリスに対して愛着を捨ててイギリスとのもつれた結び目を断て」と述べ、また他の筆者は「今やアメリカ植民地を糾合して大共和国を形成すべき時がきた。」と主張した。独立に傾いた人々は王への強い不信を表明した。抑圧政策がくり返し続けられ強化されてきたのは、ジョージ三世が従来考えられたように、君側の奸に惑わされているためではなく、彼自身が王政推進の張本人であるからではないか、という考えがしばしば表明された。そのような国王に対

する忠誠を保つべき理由はないのである。「ジョージ三世王よ、あなた自身の行為によって、あなたの王冠と政府へのわれわれの忠誠はたち切られた」とある筆者は書いた。国王への不信は君主政そのものへの反対を導いた。何人かの論者たちは「王は他の人間と同じく人間のあらゆる欲望に動かされるものであるから、彼らは機会あれば、恣意的権力を振り、すべてのものを自らの意志に従属させようとする……君主政は暴政を生みやすい」と論じた。

右にあげた例が示すように、一七七六年一月に『コモン・センス』が出版されるまでには、国王および君主政への不信と独立の肯定とを表明するいくつかの文章が北米植民地の新聞紙上に現われていたことは確かである。しかし、それらはまだ散発的であった。『コモン・センス』の刊行とともに独立をめぐる議論はにわかに公然かつ活潑なものになり、独立論が急速に盛り上る。トマス・ペインによって書かれたこのパンフレットはアメリカに独立の決断を促す触媒となったのである。

ペインの『コモン・センス』は後の版に付け加えられた追加の部分を見ると四つの章から成り立っていた。

第一は政府の起源を述べた章、第二は王政批判の章、第三は独立の利点を論じた章、そして第四は独立を戦いることが可能なことを主張した章である。第一と第二との議論は連続しており、第三と第四との議論も連続しているから、『コモン・センス』は大別して二つの部分から構成されているといってもよいであろう。

ペインはイギリスの政治体制について、二つの古代の暴政の悪い遺物と新しい共和政治の要素との混合であると述べた。二つの遺物とは「国王という君主政治の暴政の遺物」であり「貴族院という貴族政治の暴政の遺物」である。人民から遊離したものであってイギリスの自由には無益である。イギリス人の自由は「庶民院という新しい共和政治の要素」にもっぱら依存しているのだと、彼は主張する。ペインはこうして、国王、貴族、平民の三者の権力の均衡によって自由が保障されるというイギリス憲法論を一蹴した。そのような観念は「はかげている」のであった。人民の代表による政治すなわち共和政のみが、人民の自由と両立すると彼は考えていたのである。イギリスおよびアメリカのホイッグが従来イギリスの政体を混合政体と認めて、それを肯定していたことを

考慮すれば、その点で『コモン・センス』はきわめて大胆であり急進的であった。

人間社会に存在する差別の中で、人間を王と臣民とに区別することはほとんど不合理なものはないとペインは主張した。政府の起源をたどれば、最初は人民が彼ら自身の代表を選んで公共の問題を処理する一種の共和政治として始まったものである。イギリスの君主政の起源といえ、フランスのある私生児（ノルマンディー公ウイリアムのこと）が武装した盗賊をひきつれて上陸し、住民の同意もなしに勝手にイギリス王になったのであり、その起源には「何らの神聖さもない」と彼は述べた。そして彼は世襲制君主政の愚かしさと弊害を激しく批判した。王位につく者は自分は支配するために生まれたと考えるために傲慢になり、他の人々から区別されているために、うぬぼれに毒され、国民の本当の利益を知る機会に乏しい。そのために彼らはしばしば統治者として国内の誰よりも最も無知で不適當な人物となっているのだ。世襲制は王位継承者がどんなに年少者、病弱者、馬鹿者、悪人であっても、王位につける。その度に被害をうけるのは人民である。世襲制は政治的安定をもたらずものとして

弁護されるが、実際には、イギリスの歴史は争乱に満ちている。要するにイギリス王とは国民を貧乏にしたり、内部で争わせたりする有害無益の存在にすぎないと彼は論じた。<sup>(3)</sup>

ポリーン・メイヤーは『コモン・センス』刊行までに、アメリカ人は共和主義者になりつつあったのであって、ペインが共和主義の大義を弁じた時には「その主題についてそれ以前の五年間に議論されなかった論点は無いに等しかった」と主張する。<sup>(4)</sup> たしかに、ペインを独創的な思想家とみなす者はないであろう。彼の本領は大衆的啓蒙家といふべきところにあった。メイヤーのいうように、ペインの君主制批判の論点はそれまでの数年間にアメリカで書かれた文章の中に現われていたけれどもそれは『コモン・センス』の君主制批判の意義を減ずるものではない。『コモン・センス』のように、それらの論点をひとまとめして、激しい世襲君主政批判を展開した論文はなかった。それは卑俗で刺激的な文体によって全民的に広い読者層を引きつけ、王政に対して偶像破壊的な効果を発揮した最初の文書となったのである。

『コモン・センス』の第二の部分は、本国と植民地と

の紛争の経緯についてくどくは述べない。著者はただ、国王が植民地に対して武力を行使し、本国の国民もそれを支持している以上、本国との和解はもはや過去の夢であり、独立について考えねばならないと主張する。イギリスからの独立に不安を抱く人々に対して彼はそれが無用であることを力説した。アメリカはイギリスとの結合の下に繁栄したからといって、独立後の繁栄に不安を抱くのは誤りである。アメリカはイギリスとの結びつきがなくとも、同様に、おそらくより以上に繁栄したに違いない。「アメリカを豊かにした輸出品は生活の必需品であるから、ヨーロッパ人が食うという習慣をやめないかぎり、つねに市場に事欠かないであろう」と。一方イギリスに従属していれば、イギリスはつねに自己の利益のためにアメリカの貿易に制限を加えようとするであろうと彼は述べた。アメリカはイギリスによって安全を守られてきたというのも誤りであると彼は論じた。実際には、アメリカはイギリスとの結びつきのために、無関係な戦争に何回もまきこまれてきた。イギリスに従属しているかぎりアメリカは戦争にしばしばまきこまれる運命にある。独立すればアメリカは平和を維持できる。どの国も

アメリカと貿易することに利益を見出すから、どの国もアメリカと友好関係を保とうとするであろう。アメリカの貿易はつねにアメリカに安全の保障をもたらすであろう。このような議論もフランクリンらによって、すでに述べられていたところであり、革命派指導層の間ではとくに新しい議論ではない。<sup>(5)</sup>しかしそれを雄弁に公衆に訴えたのはペインが最初であった。

イギリスに結びついてることによって得られる利益が一つでもあるかと彼は問うた。イギリスからの分離独立のみがアメリカに利益をもたらすのであった。そしてそもそも偉大な大陸国家であるアメリカが大西洋を距れた島国に従属しているのは不自然であり馬鹿げていると彼は論じた。

彼は主として独立の利益や必然性について論じたが、ジョージ三世やイギリス本国に対するアメリカ人の敵意をかき立てることも怠らなかつた。彼は国王に対して「冷然と人民の虐殺を聞くことができ、自分の魂の上に人民の血をぬって平気で眠れる卑劣漢」というような怒りの言葉やイギリスの「王なる野獣」というような軽蔑の言葉を用いた。<sup>(6)</sup>

『コモン・センス』は刊行から三カ月以内に十萬部以上が売れたという。この数は当時の人口（一三植民地の白人人口は二〇〇万と推定される）を考へるならば驚異的な数であった。人民の間で識字率が高く、文書を通じての扇動が可能だったのである。これまでのパンフレットと異なり、『コモン・センス』には精緻な法律学的議論は全くなく、著者のいう「常識」にもとづいて平明な議論が展開され、卑俗な言葉、卑近なたとえをもつて、説得的な文章が組み立てられていた。これは大衆の言葉で書かれた初めてのパンフレットであった。その大衆性に『コモン・センス』の政治的扇動の著作としての成功の因があった。

## 二 「イギリス人」トマス・ペイン

『コモン・センス』の刊行まで、ペインは無名の人物であった。『コモン・センス』を読んだ多くの人は、フランクリンかジョン・アダムスあるいはサミュエル・アダムズのような著名な指導者によって書かれたのではないかと思つた。<sup>(2)</sup>『コモン・センス』は最初匿名で刊行され、ただ「イギリス人からのアメリカの住民への訴

え」と表紙に記されていただけであつた。「イギリス人」という言葉が用いられたことは興味深い。実際ペインはアメリカ人というよりはイギリス人であつた。ペインがフィラデルフィアに着いてからまだ一年そこそこしかたつていなかった。

イギリスでの彼の生活は失望と挫折の連続であつた。

婦人用コルセット作りの職人であつたペインの父親は頭のよい息子に学問をもたせようとして、学校に入れたが、ペインは型にはまつた学業、とくにラテン語の学習を嫌い、学校をやめた。ペインは結局コルセット作りの技術を身につけたが、コルセット作りを業とすることにも不満足で、この職業から脱出を求めさまざまな仕事を試みた。彼はやがて物品税務局の官吏となつたが、生来勤勉とはいえない彼は、検査の手を省いてめくら判を押していたことが露見して免職になつた。彼は嘆願して再就職を認められたが、物品税務局の検査官の待遇改善を求める運動中、再び免職された。その間、彼は最初の結婚で妻を失い、再婚生活も妻の店の経営に失敗して長くは続かなかつた。その日その日の生活にも困窮するようになったペインは、幸に当時ロンドンにいたフランクリンに

逢う機会を得、「才能ある有為の青年」(実際には中年)という彼の紹介状をもらって、新大陸に新たな運命を求めることになったのである。ペインは当初イギリスで若干の経験がある教師として身を立てるつもりであったが、フィラデルフィアで出版と書籍販売を行なう書店に職を得て、その店の出版物に執筆し始めた。こうして彼はアメリカ革命の論客として登場する機会を得たのである。

一七七五年の間に、彼は本国と植民地の紛争について論ずるいくつかの文章を書き、革命の指導者たちに知己をもつようになった。戦争勃発後の情勢を見守っていた彼は一七七五年が終りに近づくにつれてアメリカの独立を大胆に主張すべき時が来たと考え、『コモン・センス』をまとめたのである。

ペインの経歴についてやや詳しく述べたのは、アメリカの独立を大胆に公然と主張して大きな説得力をもったパンフレットがアメリカで活動してきた指導者によってでなく、ペインのようにイギリスから来たばかりの文筆家によって書かれたという事実が興味を感じさせるからである。このことはアメリカ革命のもつ逆説の一つである。そしてそれは必ずしも偶然とはいえない。アメリカ

革命の指導者たちは概して植民地の上層階級に属していた。彼らはイギリス帝国の中であって発達した植民地において地位を築いていたので、イギリス帝国の中で本国の支配からの自由を保持できるならばそれが最善であると考えてきた。彼らには十数年前まではそのような自由をほぼ享受していたという記憶があったのでなおさら、イギリス帝国の中でそのような自由を回復することを目的としたのである。

革命の指導者たちはイギリス帝国の中で満足すべき解決を得られるという望みを棄てむしろ独立を望むようになった。彼らは公然と独立を唱えることには慎重であった。サミュエル・アダムズ、ジョン・アダムズやバトリック・ヘンリーは一七七五年には独立のみがアメリカのとるべき唯一の道であると考えていたことは確かである。しかし彼らは政治指導者として、独立を公然と提唱することによって抵抗運動が分裂し弱まることを用心しなければならなかった。独立をめざすにしても既成事実を次々と積み重ねていくのが政治指導者としての彼らの方法であった。また社会的地位も財産もある指導者たちは先走りして国王への反逆の最も目立った扇動者となって

すべてを失う危険を用心していた。独立を公然と提唱するパンフレットはペインのような人物に書かせることが彼らの運動のためにも彼ら個人のためにも安全であった。

ペインに『コモン・センス』の執筆をすすめたのはフィラデルフィアの革命派の若い指導者として活動していたベンジャミン・ラッシュである。ラッシュは独立を主張する覚書をまとめたがそれを発表することをためらっていた。彼はそれを見せ、「君は身軽だから何も恐れるものがない。いざとなればどこへでも行くことができる」からといって、独立を主張する論文を書くよう彼を促したと回想録の中で述べている。ラッシュはペインの原稿ができ上がったとき、それをフランクリンや両アダムズに見せるように勧めた。彼らが『コモン・センス』刊行前にその原稿を読んだかどうか明らかではないが、ラッシュの回想録はペインが独立を目ざす革命指導者の代理人を勧めた事情を物語っている。『コモン・センス』という題名もラッシュが勧めたものであるという。<sup>(8)</sup>アメリカ人は長い間国王の権力を身近に抑圧的なものとして感じるものがなかったし、イギリスの身分社会の外で生活していたから、イギリスの君主政や身分制に強

い反感をもたなかった。ペインのように、イギリスの身分社会の下積みの中で挫折感を味った人物こそ、イギリスの君主制、身分社会を激しく攻撃することができたのであり、ペインのようにイギリス社会の脱落者としてアメリカに渡ってきた人物こそ、イギリスとのつながりを棄て、自由な市民の共和国として独立すべきことをアメリカ人に呼びかけることができたのである。彼の君主政を否定する思想が、どのような思想家の影響によって、いつ形成されたものであるかは明らかではない。それはむしろ彼自身の生活体験から出てきたものとみるべきであらう。

ペインはイギリスから来たばかりであるという点でアメリカ革命期の他の著名な文筆家たちと異っていただけでなく、また彼の役割が文筆家としてのそれに留まり、政治指導者の役割を演じることがなかったという点でも他の文筆者と異っていた。『コモン・センス』によって名声を得た彼はアメリカの市民となり、大陸会議や地方政府でいくつかの「書記」の役についたが、一度も公職に選挙されて政治家として活動することはなかった。彼は政治指導者として活動するための才能も野心もなかっ



たのである。革命戦争が勝利に終った後、彼の関心は公共の問題についての議論よりも、橋梁の設計という科学技術的作業に向けられていった。知識人としてのペインはアメリカのどの階層とも結びつきをもたず、彼の生活はアメリカ社会に根を下していなかった。彼は親しい友人に乏しく、有名であっても孤独であった。その孤独感が彼をして憲法制定会議が開かれる一七八七年に橋梁設計の売りこみのためにイギリスに赴かせた一因であろう。

### 三 独立の決断と共和政の採用

『コモン・センス』が実際よりも一年前に刊行されたとすれば、これほどの共感をよび起すことはなかったであろう。あまりにも極端な意見として、アメリカのホイッグの間でも迷惑がられ、あるいは敬遠されたに違いない。ペイン自身、前年に発表した文章では和解を望む立場に立っていた。<sup>(9)</sup>しかし一七七六年一月までには、戦争勃発以来八カ月を経過し、アメリカ人が期待した本国政府の政權交替や政策転換もなく、武力制圧の方針が推進されてきたために、彼らの間に国王への不信と本国同胞への失望が高まり、独立に進むより道はないという考え

方が次第に拡がっていた。国王が本国政府の横暴を抑えてくれるという期待が失われたとしても、本国の同胞がイギリス人の自由のための闘争とともに立上ってくれるという期待があれば、独立が唯一の道ということにはならない。「アメリカ革命」ではなく「イギリス革命」への展望があるからである。しかし一七七六年始めまでには、その期待も失われつつあった。「イギリスの政府だけでなく、人民全体が腐敗し全く徳性を失っている」とエルブリッジ・グリーは感想を記した。<sup>(10)</sup>『コモン・センス』はそのような時期に登場し、アメリカ人を共和主義と独立とに向かわせる触媒としての役割を果たしたのである。

ペインはイギリスから独立して自由な市民の共和国を形成せよとアメリカ人に訴え、彼らの間に独立と共和主義への熱狂をよび起した。全面戦争はそれに見合う戦争目的を求める。彼らが戦争を続けていくためには、一七六三年以前の状態への復帰というような限定的な目的ではなく、王政に踏みこじられた世界における唯一の自由の国の建設という、情熱をかり立てる戦争目的が必要になりつつあった。「おお、人類を愛する人々よ……決起

せよ、旧世界は至るところ圧政に踏みこじられてゐる。自由は地球上から追いつたてられてゐる。……自由の亡命を受け入れよ、そしてただちに人類のために自由の避難所を設けよ。<sup>(11)</sup>『コモン・センス』の雄弁な扇動は彼らの心理的必要に合致し、それを充たしたのである。

『コモン・センス』の刊行は独立のもたらず利益についての公然たる議論を活発にした。『コモン・センス』に表明された議論を敷衍しつつ、多数の論文が新聞においてイギリスへの従属の不利と独立の利益とを強調した。これらの論文は、これまでのアメリカの繁栄はイギリスの恩恵によるのではなく、アメリカ人の努力によるものであり、イギリスによる束縛を脱すれば、アメリカはさらに一層の発展が可能となる。独立すれば諸外国と平和を維持しつつ、貿易を行なうことができるなどと論じ、いずれも独立したアメリカについてバラ色の展望を描いた。独立の反対論者も沈黙していたわけではない。彼らはイギリスとアメリカの文化的共通性やアメリカがイギリスとの結びつきによって得ていた利益を強調し、独立のために戦うにはアメリカはまだ力不足であり、独立しても内部の安定と対外的安全とを保持できるかどうか

か疑わしいと論じた。それゆえ、立憲的原則に基いて本国と和解する可能性を忍耐をもって求めるべきなのであり、なぜ今急いで先のわからぬ暗闇に飛び込む必要があるのかと反問した。<sup>(12)</sup>

しかし彼らの議論は独立を求める急速な世論の高まりを抑えることはできなかった。世論の高まりを反映して、諸植民地の植民地会議は次々と独立支持の立場をとり、それとともに大陸会議の大勢も独立に向かつて動いた。

六月七日、独立の宣言と連邦形成の正式化および外国との同盟を求める有名な決議案がヴァージニアの代表から大陸会議に提出された。外国とはフランスとスペイン、とくに前者を意味していた。イギリス王への忠誠を絶つて共和政を樹立しようとした指導者たちがブルボンの専制君主国の援助を得ようとしたことは興味深いが、熱烈な反君主政論者のペインでさえ、『コモン・センス』の中でフランスやスペインの好意的介入を期待していた。<sup>(13)</sup>この決議案の採決は翌月まで延期されたが、七月二日、採決がおこなわれるまでには大陸会議の大勢は決まっていた。独立はニューヨークが棄権したのみで可決され、四日に独立宣言が採択された。

独立に踏み切ったアメリカ人は共和政の採用を当然のこととみなし、それについては彼らの間では何の異論も出なかった。アメリカのホイッグが従来イギリスの混合政体を讀えてきたこと、一七七五年にはまだ彼らの君主政批判の声は散発的だったことを考えるならば、彼らの君主政から共和政への転換はまことに急速に一気に行なわれたといえる。ただし彼らが君主政を公然と批判する以前から、すでに共和主義に接近していたことに留意すべきであり、それを考慮すれば、共和主義への転換はそれほど急なものとはいえないであろう。

しかし、独立の時までに、アメリカのホイッグのすべてが熱烈な共和主義者になつたわけではなかった。独立をためらつた穏健派の間には、共和国の連邦という体制の安定性についての不安が存在していた。しかし彼らとしても、独立以外に道がないとなれば、独立したアメリカで当面、君主政をとりうる条件は乏しいことを知っていたから、共和政に移行するのが唯一の現実的な選択だと考えたのである。大陸会議における独立の決議の際に、採決の時まで反対し続けたジョン・ディキンソンは、イギリスの立憲君主政の長所を認め、アメリカにおける共

和政の成功について不安を感じていた。<sup>(15)</sup>しかし彼はイギリスから独立するとなれば、共和政をとる以外に現実的選択はありえないと考えていた。独立宣言の署名者の中では最も保守的な立場に属したカーター・ブラクストンはヴァージニア憲法制定に際して、イギリスの政治体制の長所を見失うなと警告したが、イギリス流の君主政を採用することが可能だと考えたわけではない。彼は終身の行政首長、終身の上院議員など共和政の枠の中で、イギリスの政治体制に近いものを創ることを提唱するに留まった。<sup>(15)</sup>ディキンソンやブラクストンは共和政の採用が民主主義のゆきすぎを導き、社会に混乱と無秩序をもたらすことを恐れていたのである。

一方、積極的に独立を推進した多くのアメリカ人にとっては、ペインの場合と同じく、共和政とはたんなる現実的選択ではなく、革命的情熱をもって実現すべき目的となつたのである。

#### 四 ペインとブルジョワ・デモクラシー

アメリカの積極的な革命派にとって、共和政の樹立が革命的情熱の対象となつたとしても、人民が自ら統治す

る共和政は存続が難しい脆弱な政体であることは、彼らの多くが意識していた。共和政の存続は人民の公徳心を必要とすることは西洋の政治思想家によって、しばしば主張されてきたことであつた。

アメリカの共和主義者たちは、マキアヴェリやモンテスキューにならつて、人民の公徳心の維持に適した社会的条件があると考へた。自営農民が人民の多数を占め、特権階級が存在しないアメリカ社会は、まさに人民の徳性を維持するに適した社会であるようにみえた。<sup>(16)</sup> アメリカの共和主義者たちはモンテスキューと同じく「共和政は奢侈とともに終る」ことを恐れた。奢侈は共和国の市民を退廃に導くからである。ヴァージニアの権利章典においても、質素は共和国の人民が守るべき徳目に挙げられていた。経済的繁栄が質実剛健の氣風を弱め、奢侈を助長することは当然考へられるところであつた。アメリカの共和主義者にとつて、経済的自立は市民としての資格要件であつたが、過度の繁栄は市民の奢侈好みを生み、彼らを私利私欲の追求に走らせるものとして恐れられた。<sup>(17)</sup> ジョン・アダムズはニューイングランドの政治家として講和交渉の際、ニューファウンドランド周辺水域等に

おける漁業権の確保のために大いに尽力したが、彼は一方で漁業がもたらす繁栄がニューイングランドの人々を墮落させるのではないかという不安を表明していた。ジェファソンは外交官としてアメリカの産物のための海外市場の拡張に努力したけれども、共和国の健康という観点からは、多分に自給自足的な農民から主として構成される社会であることが望ましく、中国のように限られた貿易関係しかもたないことが最善であると考へていた。しかし彼自身が属するプランター階級も比較的富裕な農民も商業的農業を営んでおり、海外の市場を必要としていた。彼自身認めたように、貿易を中国なみにすることは「現実的な政治家のよくなしうるところではない」のであつた。<sup>(18)</sup> アダムズにせよジェファソンにせよ、経済的繁栄が奢侈の氣風を生み、人民を墮落させることを恐れながら、實際的政治家としては経済的繁栄のための機會の確保に努めたのである。前述のように、七六年前半における独立の是非をめぐる議論では、経済的繁栄が独立のもたらす成果の一つとして主張されていた。共和政への情熱の盛上りの中でも、独立は実利の問題としても議論されていた。革命の指導者たちは質実剛健の氣風の保

持をどれほど重視したとしても、経済的繁栄の展望を否定することはできなかった。彼らはジェファソンと同じように商業の発展がもたらす弊害を恐れていた。ジェファソンは商業主義を恐れつつ、農業の「侍女」として商業の必要性を認めた。商業を外国商人に委せることも現実的だとは考えなかった。しかし彼は工業は外国に委せるべきだと考え、それによって都市の発展を抑制しようとした。自営農民は共和国の人民としての徳性を与えられた「神の選民」である。「耕作者の大部分が道徳的に腐敗した例はどこにもない。」一方、「どの国でも、農民と農民以外の市民階級との人数の比率は、その国の健全な部分と不健全な部分との比率であり、またそれは、その国の腐敗の程度を測る絶好の晴雨計でもある。」という彼の言葉はよく知られている。<sup>(19)</sup>

一方、ハミルトンのように、アメリカの指導層の中には、商工業の発展は必然であり、また望ましいことだと考える者もいた。彼らにとっては、分権的な共和政は過渡期のものであり、やがてアメリカも中央集権的な君主政に移行せざるをえないのであった。一七八七年の合衆国憲法会議では、いずれはアメリカにも共和政を維持で

きない時代が来るという趣旨の発言がいくつかあった。<sup>(20)</sup> そのような時代の到来を好まない者も、将来の問題としては、それを否定しなかったのである。

ペインは商工業の発展が共和政を脅かすという恐れを抱かなかつた。ただし彼も『コモン・センス』の中で即時独立に踏み切るべき理由を述べる際に、「人口が増加して貿易が盛んになると、人々は貿易に専念しすぎて他のことに関心を失う」と論じ「商業は愛国心も軍事防衛の精神もともに衰退させる」と主張した。また「イギリスも商業の繁栄につれて本来の精神を失った」とも主張した。<sup>(21)</sup> これは農本的共和主義者の見解に似ている。彼がこのような見解を表明したのは、即時独立論を主張する文脈においてのみであって、その他の場合にはそのような見解はもち出されていない。これは彼の思想の中では異和感を与える部分である。あるいは、独立を是とする人々の間で囁かれていた議論を、読者に決断を促す一助として採用しただけであるかもしれない。『コモン・センス』においても彼は「われわれの〔対外的〕計画は貿易である」と述べ、イギリスと結びついていればアメリカの貿易は戦争の場合壊滅的打撃を受けるが、独立すれ

ば全ヨーロッパと平和を保ちつつ貿易を行なうことができる。「貿易はつねにアメリカを守ってくれるだろう」と論じ、貿易を重視していた。<sup>(22)</sup>

ペインが商業の発展を進歩とみなし、それを歓迎していたことは明白である。彼は自ら主張したように「商業の擁護者」であつた。<sup>(23)</sup>生産における分業の発展とそれを統合する商業の発展とは人々を国内的にも国際的にも経済的な相互依存関係の網に結びつけ、彼らの間に共通の利害を形成すると彼は考えた。そのような関係の発展はアメリカの国としてのまとまりにも、さらには国際的平和にも役立つのである。「交易および商業の法則は、個人の間のものであれ国家間のものであれ、互恵的利益の法則である」と彼は述べた。<sup>(24)</sup>ジェファソンの場合、経済的に自立し相対的に孤立した農民から成る社会が共和政に適した社会であつたが、職人出身でアメリカでも都市の職人・企業家と交際があつたペインにおいては、相互依存関係によって結びついた市民から成る社会こそ共和政に適したものであつた。彼は人間の徳性と理性について楽観的であり、商工業がもたらす経済的繁栄が人民を墮落させて共和政を危くするとは考えなかつた。彼はま

た、特権身分を廃止した共和国においては、商工業の発展は階級的対立よりも調和をもたらし、貧富の差異よりも一般的繁栄をもたらすと考えた。彼のこの考えは一七九一年に『人間の権利』を書いた時にも変つていない。

「アメリカでは一般人民が君主国では見ることでできない豊かさの中で生活している。」「貧しい者は抑圧されていないし、富める者も特権を与えられていない。勤勉の習俗がその犠牲の上に放埒を重ねる宮廷の浪費によって辱かしめられることもない。政府が公正であるから租税も輕微だ」と彼は書いている。<sup>(25)</sup>

ペインは王政や特権身分を攻撃するに極めて急であり、その限りにおいては急進的な思想家であつた。しかし王政と特権身分が廃止されてしまえば、彼の立場はもはやとくに急進的ではなかつた。彼は財産所有による参政権の制限について反対し、自立的市民という参政権の要件を広く解釈した点で、また一院制議會を主張した点で、フィラデルフィアのトマス・ヤングやジェイムズ・キャンソンの急進派の指導者たちと相通ずる処があつたけれども、彼らと異なり、富裕層に対する不信や敵意を煽動することはなかつた。

彼にとって敵はイギリスの王政でありイギリスの身分社会であつて、アメリカ社会は貧富の差はあるにせよ、著しく平等的な社会であると思われたのである。

イギリスから来たペインにはアメリカ社会は階級的差異よりも階級的同質性が目立つ社会であつた。「アメリカのように三百万もの人々がよい生活をして……いる国は世界広しといえどもどこにもない」と彼は述べた。「日雇労働者でもよく働けばイギリスの職人に匹敵する収入を得られる……アメリカでは農夫は皆自分の土地をもっているが、イギリスでは百人に一人もない。」<sup>(26)</sup>イギリスの国王や貴族に向けられた彼の敵意の対象はアメリカには存在しなかつた。彼は都市の職人層の市民としての徳性と同様に富裕な商人の徳性をも疑わなかつた。実際、彼はアメリカ革命期における最も純真なブルジョワ・デモクラシーの思想家といつてよいであらう。彼の共和国のヴィジョンは商工業の発展を恐れぬ点で近代的であつた。彼は資本主義の発展と共和政の発展とを、ともに人類社会の進歩とみなし、両者の結びつきに何らの不安ももたなかつたのである。それゆえ、革命戦争の後半以降、彼がベンシルヴァニアの商人政治家ロバー

ト・モリスに近づき、経済問題について、モリスと同様の立場に立つて論じたのは、売文家的な要素もあつたが、ペインにとって不自然なことではなかつた。彼はベンシルヴァニア州の物価統制に反対し、また負債者救済のための紙幣乱発に反対し、モリスが設立した北アメリカ銀行の存続を弁護した。<sup>(27)</sup>これらの争点をめぐつて、彼はアメリカの政治における経済的利害の対立を認識したはずである。しかし彼は自由な市民の共和国における経済的利害の調和を信じ、このような経済的対立が政治体制を揺がすものとなるとは考えなかつた。彼は政治による経済的利害の調整機能を重視しなかつた。彼にとって、政治はいぜんとして公德心の具現化の過程であつた。彼は基本的にはこのような公德心への信頼を失つていなかったのである。公德心への素朴な信頼を保つていた点では、ペインの思想は古典的であつた。

しかし一七八七年までには、アメリカの指導層に属する多くの人々が、アメリカ人もまた徳性に欠けていると感ずるようになっていた。革命は人民の公德心を昇華させることにはならなかつた。彼らは公共の善のためにではなく私利のために行動する。そうであるならば、共和

政の存続のためには、共和主義思想の再構成とそれに基づく政治体制の再編成が必要となる。ジェイムズ・マディソンが展開した合衆国憲法会議前後における全国政府強化のための議論と行動は、そのような必要への対応であった。<sup>(28)</sup> マディソンは広域を統治する共和国の方が狭い領域を統治する共和国の方が安定すると主張し、州から連邦への権限の移転によって、連邦政治に多元的利害の調整機能を与えようとした。

ペインは民主的な共和主義者としては例外的に、有力な中央政府の形成を一貫して支持してきた。革命直前にイギリスから来たばかりだったペインは、多くのアメリカ人と異なり、特定の州を自分の国と考えることはなかったのである。彼にとって唯一の結びつきは「アメリカ」であった。それゆえに、彼は連邦の問題を論じる時には、つねにナショナルリストでありえたのである。しかし彼は連邦強化論者だったとしても、一七八七年当時、連邦体制改革の問題は彼の知的情熱をかき立てるものではなかった。彼は共和政の政府の機構の具体的問題について強い関心をもたなかった。フィラデルフィアで連邦体制再編のための会議が開かれる政治の季節に彼がアメ

リカを去るのは、関心はあるものの、自ら文章をもってそれに参加すべき切迫感や情熱を感じることがなかったことを物語っている。<sup>(29)</sup>

× × ×

一八〇九年にペインが死を迎えるまでには、彼はアメリカでは忘れられた英雄となっていた。彼はフランス革命期に『人間の権利』を書いてイギリス人のために革命を弁護し、フランスに赴いて一時は国民公会の議員となったが、ジロンド派の没落の後ジャコバン派によって投獄された。釈放後アメリカに戻ることを望み、ようやく一八〇二年かつての友人ジェファソン大統領の計らいで米艦による渡米の道がひらけた。しかしアメリカ人は概してペインに冷かった。彼が滞仏中に書いたキリスト教批判『理性の時代』のゆえに無神論者として保守派から激しい非難を浴びた。彼の『人間の権利』に共感を覚えた人々も彼を弁護することができなかった。ジェファソンも政治的悪影響を考慮して彼を敬遠した。ジェファソン自身をはじめアメリカの知識人には理神論者は少なくなかったが、ペインは露骨なキリスト教批判によって越



えるべからざる線を越えたのである。トクヴィルが指摘したように、アメリカにおいては聖職者は多くは革命の支持者であったし、共和主義者はキリスト教の信奉者であった。<sup>(10)</sup> ペインのキリスト教批判はフランスにおいては共和主義者の気分を反映するものであったとしても、それはアメリカの雰囲気とは著しくかけ離れたものであった。これによってペインはアメリカにおける名声を決定的に失ったのである。一八〇九年、彼はニューヨークの近郊で孤独の中で死んだ。

(1) ペインについての最近の伝記としては、Eric Foner, *Tom Paine and Revolutionary America* (1976), David Freeman Hawke, *Paine* (1974) があり、前者は民衆づくに職人層の代弁者としてのペインを好意的に描き、後者は浮遊する知識人としての彼の人物像を描いてゐると見える。ペインはそのほかいくつもの著作や論文で論じられてきたが、彼の人物評価はまだ定っていない。フォナーの見解には多くの点で同意するが、ペインとフィラデルフィア職人層との結びつきを強調しすぎている。経済的自由放任主義の思想家と切り切ることにも問題がある。彼は資本主義と民主的共和主義の発展を両立すると考えた点では近代的であったが、政治を市民の公徳心の表現の場とみなした点では古典的であった。彼は基本的には市民社会における経

済的利害の調和を信じていたが、経済的な公共善のための政治の介入を否定しなかったのである。

(2) 以下 Pauline Maier, *From Resistance to Revolution* (1972), pp. 291—92; Arthur M. Schlesinger, *Prelude to Independence* (1965), pp. 249—50.

(3) Moncure Daniel Conway, ed., *The Writings of Thomas Paine* (4 vols., 1894) を用い、訳書として岩波文庫版を参照した。また一橋大学古典資料センター所蔵の *Common Sense* 一七九一年版(ロンドンで刊行のもの)をも参照した。以下 *Writings* と略記。

(4) Maier, *Resistance to Revolution*, p. 288.

(5) *Revolutionary Diplomatic Correspondence*, II, p. 43.

(6) *Writings*, I, p. 93, 99.

(7) *Works of Benjamin Franklin*, VII, p. 80, 86—87.

(8) Benjamin Rush, *A Memorial Containing Travels through Life or Sunday Incidents in the Life of Dr. Benjamin Rush, Written by Himself* (1905), pp. 84—85.

(9) "A Dialogue between General Wolf and General Gage in a Wood near Boston," *Writings*, I, pp. 10—13.

(10) Maier, *Resistance to Revolution*, p. 261.

(11) *Writings*, I, pp. 100—01.

(12) *American Archives*, 4th Series, IV, pp. 225—27, 1141—43, 1170, 1524; V, pp. 188—90, 443—46, 515—17, 542—46.

- れた。
- (13) *Writings*, I, pp. 110-11.  
 (14) Gordon S. Wood, *The Creation of the American Republic* (1969), p. 205.  
 (15) *American Archives*, 4th Ser., VI, pp. 748-52.  
 (16) Wood, *Creation of American Republic*, p. 103. 中央公論社版『世界の名著』の『キヤムケリ』三二九—三〇頁、『キンテスキュー』四〇五—八頁。  
 (17) Wood, *Creation of American Republic*, p. 52, 65, 108—16.  
 (18) 拙稿「アメリカ革命の外交政策」『一橋論叢』八五巻四号、五〇〇頁。  
 (19) 岩波文庫版『ヴァージニア覚書』、二九六—九八頁。  
 (20) 拙稿「アメリカ合衆国憲法体制の形成」一橋『法学研究』一二号、二〇—二二頁。これらの点をめぐる最近のアメリカの研究動向については、同一三号に発表される拙稿「アメリカにおけるアメリカ革命史研究の展開」を参照されたい。
- (21) *Writings*, I, p. 107.  
 (22) *Ibid.*, p. 83.  
 (23) *Ibid.*, II, p. 456.  
 (24) *Ibid.*, pp. 408-09.  
 (25) *Ibid.*, p. 369, 410.  
 (26) *Ibid.*, I, pp. 339-400.  
 (27) Foner, *Tom Paine*, pp. 145-209.  
 (28) 前掲拙稿「アメリカ合衆国憲法体制の形成」二二—二四頁を参照。  
 (29) この時期の彼の政治観や心境については推測の域を出ないが、このように解するのが妥当であろう。  
 (30) Alexis de Tocqueville, *Democracy in America* (Vintage ed., 1945), I, pp. 45-46, 310-26.

(一橋大学教授)